

講座報告

「自分らしく生きる」 ～性の多様性から考える～

歌謡曲は「世」を…変えることも…

ラブソングが…
洗脳？…反逆？…

1日目

- ・70年代歌謡曲からみる「男らしさ・女らしさ」
 - ・「男性の役割・女性の役割」の時代背景を紐解く
- 講師：舌津 智之（立教大学文学部 文学科英米文学教授）

歌謡曲とジェンダー

●メディア・リテラシー

- ・メディアを利用することで利便性から、豊かな生活を営むことができているが、利用だけでなく影響を受けやすい社会になり、情報の整合性を自分の目で読み解く必要がある。
- ・メディアには、マスメディア SNS（ソーシャルメディア）がある
マスメディア：特定の発信源から不特定多数へ発信
SNS：ソーシャルメディア 不特定多数から不特定多数へ
- ・歌謡曲が世の中を反映しているのではなく、歌謡曲が世の中を変えていく？

●70年代の豊かさに学ぼう

- ・様々な価値観が入り乱れ、戦前と戦後の世代が逆転した時代。
- ・古い価値観と新しい価値観がない交ぜになっていた。
- ・見合い／恋愛結婚の比率が逆転

ジェンダーの交差歌唱（CGP）

- ・日本の歌謡とジェンダーのあり方が特異なものとなり、歌手と歌詞のジェンダーが交差している歌謡曲がある。
- ・海外では、例が見られず、男性が女性の気持ちを歌うのが異様に見える
男言葉と女言葉がある、言語構造になっている日本語の言葉の特殊性がある、
- ・英語では、一人称は“I”だけ、日本語では「私、僕、俺、あたし、などなど」
日本の歌舞伎、浄瑠璃の語り物は、男性視点（男にとって都合の良い女性）で
“女らしさ”を誇張された女性像を演じている。

●性役割のステレオタイプ

60年代 男のステレオタイプを歌う

美空ひばり：“柔”で力強い男性像を歌う
水前寺清子：男の心意気を歌う

●アイデンティティの攪乱

70年代 女性が歌うとバッシングされることを男性が変わって女性の本音を歌うことで受け入れられる。

また、太田裕美は、「面食いなのになんで僕を選ばない？」など、ドラマ設定することで受け入れられやすくなる。女性が自分のことを「ボク」と言うなど。

交差するセクシュアリティ

●ヘトロセクシズム（異性愛中心主義）

山本リンダの歌「どうにもとまらない」から「…蝶になる ああ花…」部分から蝶と花になることからバイセクシュアルと読める歌詞 ……異性愛だけでない

●性的少数者の声

ピンクレディの歌「モンスター」から、存在を認められていないマイノリティーの存在を示唆すると読み取れる歌詞が見受けられる

「SOS」では、”男は狼”の文言から、異性愛が素晴らしいものではない

「UFO」では、“地球に飽きた”の文言から、男に飽きたので女性へとレズビアンテーマに読み取れる

「演」芸としての歌謡曲

●歌わされることの功罪

奥村チヨ「恋の奴隷」：男性の作った歌詞を女性に歌わせる

～参加者感想～

<ジェンダーについて>

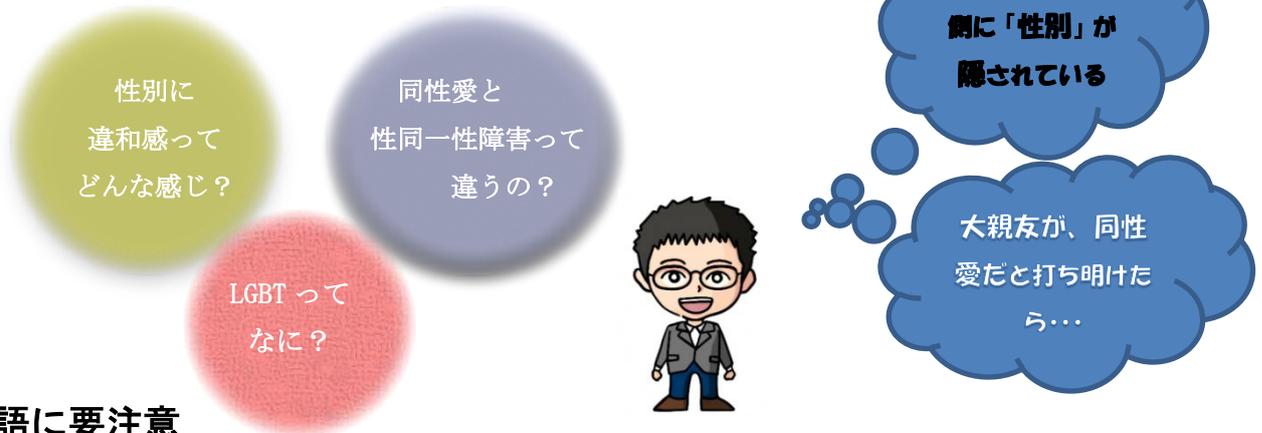
- ・男に都合のいい女らしさについて演歌でよくわかった
- ・考える一つとして歌ってみたいと思います。今まで考えても見なかった発見です。
- ・あまり歌謡曲は歌わないし興味が無いのでへえ～と思い
- ・歌謡曲からジェンダーを読み解いたことでドキッとさせられた。驚いた。
- ・歌謡曲から見える『セクシュアリティ』にあ～なる程と思った。
- ・ジェンダーの視点で歌詞を読み解くのがとても面白かった。
- ・楽しみながらジェンダーを巡る時代の流れを学べたので
- ・歌謡曲の中にジェンダーとして捉えながらのお話はおもしろかった。
- ・歌謡曲から見えてくる男女間の変化に面白かった。

<その他 感想など>

- ・次から歌謡曲を聴くとき詞が気になります。
- ・70年代の歌謡曲は、正直、あまり知らなかったですが、ピンクレディーは、大好きだったので、そのような見方をしたことがなく、面白い視点だなと思いました。
- ・『どうにもとまらない歌謡曲』読みます
- ・何回もピンクレディを聞いて歌ってきても、日本は変わらない・・・まだ演歌のようなジェンダー意識が強い、残念。
- ・昭和の歌が聴けて嬉しかったです。
- ・メディアが社会に与える影響の強さについて、もっと理解を深めたいと思いました。

2日目

- ・性の多様性に関する基礎知識
- ・自分のセクシュアリティを考える（エピソードトークを通して）
講師：飯田 亮瑠（ダイバーノン代表）



差別用語に要注意

「オカマ、オナベ、ホモ」などは「差別用語※って言われるよ」と、

小中学生に伝えたと、「差別用語とは、今まで知らなかった」という言葉が返ってくる高校生や大学生も同じ。「もっと早く知りたかった」という言葉も。

※これまで差別や侮蔑の意味を込めて使われてきた歴史がある言葉ということ。

トランスジェンダーに出会うことの、

子どもたちの反応は、「初めて本物に出会った」「反対もあったんだ」

Q. トランスマン（生まれて与えられた性は女性だが男性自認のトランスジェンダーの存在が知られていない（メディアが取り上げない）のは、なぜ？

A. 女性がズボン履くのは普通のこと、男性がスカート履くのは、笑い（ネタ）になり、視聴率につながるためメディアが取り上げるという説もある。

→男性の方がジェンダーの縛りが大きい。という見方もできる。

学校の制服で女子には、スカートスタイルに加えて、パンツスタイルなどの選択ができるようになってきたが
男子には、選択肢がない。

LGBT以外にも様々な恋愛、性別があり、言葉もたくさんある。

例：パンセクシュアル（恋愛において、相手の性別が障壁にならない。）

LGBTのLGBは恋愛対象は？という視点、Tは自分自身の性別は？という視点、

自分自身の生まれ持った性別に違和感を感じていない→シスジェンダーと言う

（多くの方は、異性愛者かつシスジェンダー→「普通」と表現される、カミングアウトなし）

=何も言わないことは「異性愛者かつシスジェンダー」、だからセクマイはカミングアウトが必要になる

呼び方の変遷 **性転換手術**⇒**性別適合手術**

ホルモン療法をけることで、客観視される変化が生じ、心の性別を尊重してもらえるようになる。

戸籍上の性別も、性自認や生活上の性別とのズレから、生活に支障をきたすことがある。

例：医療機関受診時に保険証の提示の際に本人と認められにくいなど

マスメディアの影響大

トランスジェンダーに関しては『金八先生』の放映がきっかけで、社会で認識されるようになったともいわれる。

性的マイノリティの人は本当にいるのか？

2015年の統計の性的マイノリティの割合は7.6% 13人に1人ともいわれる。

名字ランキング上位の割合は 1佐藤 2鈴木 3高橋 4田中 5伊藤 6渡辺 7山本は、2015年統計の上位7位の名字の人は日本の総人口に対して、7.6% 13人に1人で同じ割合
この上位ランキングの名字の人に出合ったことの無い人は、いないのに、
同等の割合で存在するといわれる性的マイノリティの人に出会っていないと感じるのはなぜ？
社会に「言えない空気」・ネガティブメッセージがあるからでは。

性は多様、どんな性も恋愛も攻撃されたり否定されたりしてよいものではない

セクシュアリティはアイデンティティの一つ、他人が勝手にレッテルを貼るのは人権侵害。

トランスジェンダーかな？と感じたとき・・・

「あなたはトランスジェンダーですか？」という問いかけは「あなたはいじめられていますか？」という問いかけと同じ。「はい、いじめられています」と気持ちよくサポートを受けられるだろうか？

もし、性的指向や性自認に関して、相談を受けたら・・・

信頼されている「あなた」だから相談しているケースが多い＝「誰にでも」ではない
アウトティング（＝第三者に勝手にばらすこと）しない。

もし、第三者に話さなければならないときは、本人の了解を貰ってからの方が安全。

※性的なことに関わらず、個人情報や「実は・・・」という大事な相談を
本人の了解なく第三者にばらすことは信頼を裏切ることになる

～参加者感想～

- ・具体的な説明がありとても良かった（特にトランジェスターについて）
- ・テレビでタレントが明るく振舞うことが、印象的で、実際普通の心と性が一致していない方達がとても生き苦しいことが少しずつ知ることができてとても良かったです。
- ・知ることがとても大切だなと改めて分かりました。知ること、気づくことにつながります。自分ができることがあるかもしれないと思うようになりました。
- ・30年も前に友人からLGBTであることを打ち明けられた経験があります。その時初めてセクシュアル・マイノリティーの方が実は多いということや、自分を打ち明けられず、悩んでいる方が実は（日本だけでも）多いことを知りました。
それから30年、やっと国内でも認識されるようになってきたなと感じました
- ・常に、なぜ?!・・・と感じることがたくさんありました。普通の母親、また違った自分で生きかたを見つけられたような感じがして嬉しく思いました。
- ・一人間として、多様な生き方を受け入れられる人間でいたいと思います。